2021.11.29

# 霊長研解体（４）

小嶋祥三

日本霊長類学会が、京大総長に要望書を出していた。それに対する回答が湊総長からあった。要約すると、今回の措置は研究所の組織的問題を解決し、霊長類研究所と関係する他部局との連携を密にすることにより、霊長類学のいっそうの発展を図ることを目的とした、とのことである。わたしは、今後の新しい運営体制がどのようになるか、知識を持っていない。総長の回答を読んで思ったことを述べる。

組織的問題の中身についてだが、前に書いたように、それは松沢や友永が所属していた試行言語分野と事務、実質的に松沢がつくった野生動物センターの一部教員と事務の間の問題である。霊長研についていえば、思考言語分野の研究費の使用に関して、知識も責任もない他分野、他部門が、なぜこのような懲罰的（と思わざるを得ない）な措置を受けなければならないのか。その理由が極めて希薄である。措置は当然、処分された教官、事務官がいた霊長研思考言語分野、野生動物センターに対してなされるべきだろう（この点もすでに述べた）。

組織的問題の中身として、エライ（松沢）先生に意見を述べることができなかった、という意味の報道があった。松沢は事務に対して、そのように振舞っていたのかもしれない。しかし、京大本部でも類似のことが起こっていなかったのだろうかと疑ってしまう。イシハラが起こした裁判の 1 審は 2017 年 5 月、控訴審は同年 11 月に、原告敗訴の判決が出た。この裁判について詳しくは知らないが、恐らく前年の 2016 年に大学はこの研究費の問題を把握していただろう。その後の経過をみると、この判決が妥当なものだったか疑わしく思える。この時の総長は山極氏で、執行部には湊氏もいたと思う。執行部には法律の専門家もいただろう。なぜ、キチンとした事実の調査をしなかったのか。松沢が山極前総長の「盟友」だったので、事務部を含め執行部は、調査に及び腰だったのではないかと疑ってしまう。京大本部には組織的問題はなかったと言えるだろうか（少なくも、今回のような大掛かりな調査はやっていなかっただろう）。『霊長研解体』で、わたしは山極前総長のこの問題に対する対応に疑問をもったことを述べた。山極執行部がこの問題をどのように調査したか、その記録を提出すべきだ。それをしないで、思考言語分野の研究費の使用に、何の知識も責任もない他の分野、部門を「処分」するのは、責任転嫁と言われても仕方がないと思う。

わたしは、この問題について大学の執行部は適切な対応をしたとは思えないでいる。他部局との連携を密にするためというが、研究面で密でなかった事実があるのだろうか。霊長研の大学院の卒業生が、理学研究科や、文学研究科で教授等になっていたし、それらの研究科の卒業生が霊長研で教員をやっている。共同利用研究で、他の研究機関との連携もある。連携の問題は研究面でなく、教員と事務の間の連携だろう。今回の研究費の不正は、組織とい

うよりは松沢個人の問題が大きいと思っている。湊総長は、霊長類学のいっそうの発展を期すための措置というが、霊長研の多くの教官が望んでいない、このような荒療治をする必要性、意味が分からない。今後、新しい組織がどのような運営をするか現時点では分からないが、霊長類学は発展でなく衰退に向かう可能性の方が高いと思う。仮にそうなり、一つの学問領域が、その領域の研究者の意思に反して、衰退さらに消滅させられることになったら、大学執行部はどのように責任をとるのだろうか。学問を政治的に扱っていないか、心配している。